

献辞 (藤岡光夫教授退任記念号)

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部 公開日: 2018-04-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田島, 慶吾 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00024887">https://doi.org/10.14945/00024887</a>

## 献 辞

2018年3月31日を以て、藤岡先生は静岡大学人文社会科学部を定年によりご退職されます。拙文は藤岡先生の長きに渡る静岡大学および人文社会科学部へのご貢献に対し、経済学科一同より感謝の念を表すものです。

藤岡先生のご心中を察するに自分の仕事はやり残したことが多々あるとの思いであることでしょう。退職する先生にこのような表現が非礼であることは重々承知していますが、敢えて「やり残したこと」との言葉を使わせていただきます。というのも、藤岡先生は静岡大学赴任後程なく病魔に冒されました（教務委員長の要職についておいででした）、それは厚生労働省の難病指定を受けた病気でした。ここでその病状については詳しくは語りませんが、視力のほとんどを失い、十数回の手術を受けてもなお、その進行を緩和させるのが精一杯であるのが現代医学の限界であると言えば十分でしょう。

恐らく、平凡人が、このような危難に会えば、心くじかれ、仕事に対する熱意を失い、失意の内に闘病生活をおくることになるでしょう。ところが、藤岡先生はこの病気治療のために最適な病院を求め、浜松に居を移し、そこから静岡へと通勤し、授業を行っていました。一度、ある年の忘年会にいく途上で、私は藤岡先生に静岡駅出口で行き合わせました。既にあたりは暗くなっておりました。すると藤岡先生が「あたりが暗いとよく見えな感じです」と仰り、少し恥ずかしそうに右手を私に差し出しました。私は一瞬言葉につまりましたが、平気を装い、短い距離ではありましたが、藤岡先生の手を持ちました。恐らく藤岡先生はこのことを覚えてはいませんでしょうが、私には藤岡先生の言葉を忘れることができません。決して、出席が義務であるような会ではないのです。

また、ある別の日、私は藤岡先生とバスで隣り合わせとなりました。そこで驚くべき事を伺いました。藤岡先生を襲った病はこの難病の中でも特別な型の病で、罹患者の僅か10%程度しか、この特殊な型に罹患する患者はおらずそのためにこの病気についてのデータも不足しているとのことでした。藤岡先生が私を驚愕させたのは、次の言葉です。「データが不足しているということなので、学会発表用に自分のデータを使って貰おうと思い、自分で病状をデータ化している」。藤岡先生の御専門は社会統計学です。その分野では多くの期待を集めてきました。病魔に冒されなければ、画期的な業績を残されたでしょう。病気は藤岡先生の能力の多くを奪ったことは事実ですが、藤岡先生はどんな場合でも科学者であり、核となるものを持った学者でした。このような先生が大学を去られることに対し、心からご自愛を願うものです。

本来、献辞はその先生の学問分野における業績、大学行政における活動、教育への情熱と成果等を述べる場ではありますが、敢えて以上のような文章にいたしました。本論文集は藤岡先生に捧げられています。大学を退職なされても闘病は続きますが、経済学科教員一同、先生が病気を克服し、どの様な形であれ、私たちの前に元気な姿を見せてくださることを願ってやみません。

2018年2月

静岡大学経済学会長 田 島 慶 吾